

会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

裏面にも書きましたが、今年の花まつり講演会では、「この世界の片隅に」の原作者を迎えてのトークショーがありました。話を聞いているうちに、私が以前見た報道番組のインタビューを思い出しました。

「戦争、戦争と言ってはいたが、いざ、戦争が始まる時、まさか本当に戦争が始まるのは私たちが庶民のだれも思っていないなかつた。」とよく車の運転で「事故に気をつけて」と声をかけますが、運転している本人は、誰も事故を起こそうと思つて事故になる人はいません。みんな事故は知っているけれども自分が関わるとは思わずに運転していますし、思っていない中で事故に遭います。それに似たようなものなのかも知れません。国を動かす政治家や経済界の方々は、現実味をもつて悩み、考へていたかも知れませんが、多くの庶民にとつては、まさか自分が「戦時下に生きる一人」になるとは思つてもいなかつたことでしょうか。今の私たちに似ていませんか。トランプ政権の誕生も、イギリスの「離脱も、みんな「まさか本当になるとは」思わなかつたのです。

行事予定



四月十九日 まこと会 総会

午前十一時より本堂にて

四月二十一日 ヨガの会 光圓寺本堂にて

五月 八日 京都本願寺 伝灯奉告法曹

九日 団体参拝 第三回目

五月十九日 ヨガの会 光圓寺本堂にて

五月二十五日 光圓寺 春季永代経法曹

二十八日 講師 富島昭圓師

住職が理科の出前授業の先生やっています

レモン電池で好奇心育む

東工大同窓会、久地南小で教室



支部メンバー(中央)の手ほどきを受け、果物を使った電池を作る児童

広島市安佐北区の久地南小で11日、レモン電池を刺して電池にする理科教室があつた。児童の好奇心を育て、同支部のメンバー

6人から指導を受け、銅と亜鉛メッキの針金をレモンにそれぞれ刺した後、発光ダイオード(LED)が付いたコードにつながり、小さな明かりがあつた。実験後、支部のメンバーが「電気を通しやすいレモン汁の酸で溶けた亜鉛が電子を放出するため、電流が流れる」と解説。ミカンや大根でも同様にLEDが点灯し、電圧を測つた。前原日向さん(12)は「身近な物が電池になるとは知らなかつた。とても楽しく実験できた」と喜んでた。(中川雅晴)

中国新聞(平成28年11月11日)より

この世界の片隅に・・・

四月八日はお釈迦さまのお誕生日です。

毎年広島市の浄土真宗寺院が集まって、祝賀行事を行っています。

今年の祝賀公演会では、今、映画がロングラン上映されて話題になっている「この世界の片隅に」の原作者であるこうの史代さんと映画館八丁座の蔵本健太郎さん、僧侶の釋徹宗さんのトークショーが催されました。

「この世界の片隅に」は、第二次世界大戦中の広島・呉を舞台にした、すずさんという一人の女性の生きていく様を描いたアニメーション映画です。広島を舞台にした戦争漫画というと、「はだしのゲン」が有名ですね。それに限らず、戦争物語というと、残酷だったり、恐怖だったり、怒りだったりといった負の感情が強く描かれ、画面は強く緊張したものがほとんどです。しかし、この映画の画面はほんわか柔らかいタッチで描かれていて、今までにない印象を受けます。恐くない戦争映画とでも言いましょうか。戦争中の、一般の人々の暮らしを淡々と描いています。本当に、こんな感じだったのだろうかと思いました。

この映画は、戦争を描いた映画ではなく、戦争のある日常を描いた映画だと評されています。

原作者のこうの史代さんは、世界中が戦争の大きな流れに巻き込まれて渦巻く中で、その世界の片隅に・・・生きているすずさんを描きかけたと話されました。戦争ということばでひとくりにされがちですが、その中には私たちと同じ普通の人の暮らしがあるという事実を忘れないで欲しい。食べ物がなくなったり空襲があったり、戦争から切り離されることはできないけれど、その中でも人は料理をし、食卓を囲み、笑い、世間話をしていたのです。そういう人々の生活が戦争に覆い被されて見えなくなってしまうことを知っておいて欲しい。「日常」が、「戦争のある日常」にならないように、気づいて欲しい。メッセージがそこにはありました。

